

補高便座使用で排泄動作が自立し自宅退院した術後患者の ADL 改善の要因分析

公立羽咋病院 島田 菜摘

要約：本研究は、腰部脊柱管狭窄症の術後 23 日目に地域包括ケア病棟に転入した患者が、要介護 4 の状態で退院後、認知症がある要支援 2 の夫と 2 人暮らしが継続出来た、その ADL 改善の要因分析を行った事例研究である。

ADL において排泄動作が自立は、自宅退院につながるのではないかとチームで検討した。排泄後、下肢のしびれや痛みが増強するため、立ち上がりを介助していたが、補高便座を用いて、便座の高さを高くすれば立ち上がりが容易になるのではと考え実施したところ、排泄の自立に繋がった。これは力学的に膝関節可動域が 90 度以上に拡大し、身体の重心も座面の中央から前方になったことにより、安定した姿勢調節を維持できることで立ち上がることに繋がったと考える。また、排泄が自立したことが患者を前向きにし、歩行器歩行の練習など他の ADL の自立を引き出したといえる。更に自宅退院に向けて、配食・通所・訪問介護サービスを調整したことも自宅退院への自信に繋がったと要因分析する。